

1 講演会・フォーラム等による研究成果の公開

[概要]

研究の実施状況を広く内外に公開するために、講演会・フォーラムのほか、さまざまな事業を行っている。2025度は、歴博フォーラム3回、歴博映像フォーラム1回、歴博映画の会3回、歴博講演会8回、くらしの植物苑観察会9回を実施した。また、展示室内で研究者が来館者に向けて解説するギャラリートークも実施している。2025年度は企画展示で6回、特集展示で4回と積極的に行った。これらの事業を通じて研究者のみならず一般の方々にも研究成果を発信・周知し、歴博の活動に興味と関心を持っていただくとともに、それに伴う討論や反響を経て、さらなる調査研究の課題を模索している。

広報連携センター長 鈴木 卓治

[講演会・フォーラム等]

歴博フォーラム・歴博映像フォーラム

第121回歴博フォーラム

「境界を往来した人びと」

2025年8月2日（土）

主 催 国立歴史民俗博物館

会 場 国立歴史民俗博物館 講堂

参加者 143名

1. 開催趣旨

本フォーラムは、総合展示第5室「近代」のリニューアルオープン（令和8年3月17日）を前に、展示を構成する3つの大テーマのうちの1つ、「〈帝国〉日本の社会と人びと」を中心としながら、近代における人びとの国際的な往来に関して、多角的に検討する。中国人留学生に注目しながら、東アジアにおける近代化や国際関係を人びとの経験を通して論じる基調講演を軸に、朝鮮半島と日本を往来した漁民、帝国内各地を修学旅行で訪れた子どもたち、ダム建設のために戦時期日本の山村に連行された中国人・朝鮮人・連合国軍捕虜などの事例を取り上げ、展示構成の意図や学術的背景について解説する。本フォーラムを通して「境界」の多様性や、「境界」を越えて生きた人びとの様々な経験について考えたい。

2. 開催内容

12：30～12：35 開会挨拶 西谷 大（国立歴史民俗博物館・館長）

12：35～12：50 リニューアル趣旨説明 大串 潤児（国立歴史民俗博物館・歴史研究系・教授）

12：50～13：00 フォーラム趣旨説明 吉井 文美（国立歴史民俗博物館・歴史研究系・准教授）

13：00～14：00 基調講演：留学を通してみる近代の日中・米中関係―越境と文化 村田 雄二郎（同志社大学・グローバル・スタディーズ研究科・教授）

14：00～14：15 休憩

14：15～14：30 コメント：海を渡った日本の漁師―明治期の朝鮮への出漁 松田 睦彦（国立歴史民俗博物館・民俗研究系・教授）

14：30～14：45 コメント：〈帝国〉日本の修学旅行 樋浦 郷子（国立歴史民俗博物館・研究部・准教授）

14：45～15：00 コメント：平岡ダムの建設と満島捕虜収容所―地域史の観点から 原 英章（飯田市歴史研究所・調査研究員）

15：00～15：15 休憩

15：15～16：25 パネル・ディスカッション

16：25～16：30 閉会挨拶

総合司会 吉井 文美

3. 総括

構想段階では、第5・6室リニューアルに際しての問題意識の一つである近代における人とモノの移動の拡大と、その意味について考えるフォーラムにすることを想定していたが、さまざまな分野を研究対象とする先生方に講演やコメントをお引き受け頂くことができ、多様な越境の形態とその歴史的意義、さらにその人びとの人生に与えた意味などについて掘り下げて考える機会になった。

今回のフォーラムの魅力の一つは、中国人留学生を軸に近代の東アジア国際関係について考える基調講演を主軸としながら、各コメンテーターが多様な事例を紹介する点にあった。そのためコメントの内容はそれぞれに興味深いものであったが、基調講演へのコメントというよりも独立性の高い報告のようになり、当初より全体をどのようにまとめるのかという課題があった。また、準備段階では諸事情により、顔合わせをオンラインで行ったのみで、内容について事前に十分に意見を交わす機会を設けることができなかったため、コミュニケーション不足も懸念されたが、当日は登壇者の協力もあり議論をまとめることができた。アンケートでは、フォーラム全体の時間が長いという意見が多かった一方、コメントの時間をもう少し長くしてほしいという声もあり、工夫の余地があることが感じられた。また、パネル・ディスカッションではマイクの音が小さくて聞こえにくかったという技術的な問題の指摘もあったため、今後に活かしたい。

本フォーラム全体を通して、さまざまな背景をもつ人びとが共に生きる社会をいかに築いていくのか、そして、さまざまな経験を通して人びとが自分の人生といかに向き合い、生きていくのかという現代的な問題を歴史的な文脈のなかで考える機会にできたと考えている。

第122回歴博フォーラム 「さまざまな「死」から社会をよむ」 2025年9月21日（日）

主 催 国立歴史民俗博物館

会 場 国立歴史民俗博物館 講堂

参加者 174名

1. 開催趣旨

歴史をみること、それは過去をみること。過去は多くの死の積み重ねであり、死は社会を更新し、刷新する機会であった。

地位継承、遺産相続、遺品、供養、顕彰、追憶、故人の神格化、系図や家譜など、死へのかかわりは実にさまざまである。

このフォーラムでは、特定の死と不特定の死を対照して、「継承される個別の死と社会」と「モニュメント化する集団の死と社会」という二つのテーマで、さまざまな社会の「死」を眺める。

さまざまな「死」に照らして、現代社会はどのように映るのだろうか。

みなさんと考えてみたいと思う。

2. 開催内容

10：00～10：05 開会挨拶 西谷 大（国立歴史民俗博物館・館長）

10：05～10：40 社会をとらえる「死」という視点 ―松木武彦さんを偲ぶ― 上野 祥史（国立歴史民俗博物館・考古研究系・准教授）

10：40～11：15 皇位の「継承」と過去の「記憶」 小倉 慈司（青山学院大学・文学部史学科・教授）

11：15～11：50 江戸時代の由緒探求と記憶の広がり 天野 真志（国立歴史民俗博物館・研究部・准教授）

11：50～12：25 社葬のあゆみ 山田 慎也（国立歴史民俗博物館・民俗研究系・教授）

12：25～13：30 休憩

13：30～14：05 集団の死とモニュメント―現代日本における自然災害のモニュメントと死者の表象― 川村 清志（国立歴史民俗博物館・民俗研究系・准教授）

14：05～14：40 「過去」を埋込む先史アンデス社会 松本 雄一（国立民族学博物館・人類文明誌研究部・准教授）

14：40～15：15 記憶なき過去に接点をもつ縄文社会 中村 耕作（国立歴史民俗博物館・考古研究系・准教授）

- 15:15～15:30 休憩
 15:30～16:05 多死社会からみるさまざまな死 土居 浩（ものづくり大学・教養教育センター・教授）
 16:05～16:40 さまざまな「死」と社会 大西 秀之（同志社女子大学・現代社会学部・教授）
 16:40～17:00 閉会挨拶 山田 慎也
 総合司会 上野 祥史・川村 清志

3. 総括

このフォーラムは、古今東西のさまざまな社会を対象に、「死」へのかかわりを横断的に比較することを目的とした、基幹共同研究の途中成果報告の機会である。故松木名誉教授の一周忌を記念して開催した。

人類学、歴史学、考古学、民俗学、いずれの研究も、個別の時空に限定して検討は深化するが、「死（＝過去）」を埋め込み更新する社会という共通の視点で、各研究を相対化し、横断的な比較を実践した。具体的には、特定の死者・故人へのかかわりと、不特定の死者・故人へのかかわりを対照して、「継承される個別の死と社会」と「モニメント化する集団の死と社会」という二つのテーマを用意し、さまざまな「死」から現代社会を考える場を提供した。

より多くの事例、比較から見える視点を提示することを優先し、フォーラムは報告のみで構成した。討論は設定しなかったが、最後に総括的なコメントを二つ用意して全体を集約し、個別報告の羅列を避けた。なお、基幹共同研究は、通史横断的な比較研究と、現代社会を対象とした専門研究で構成しているが、両者を連携してフォーラムを実施した。

アンケートでは、否定的な意見は少なく、概ね好意的な意見が多かった。進行を通して離席者は少なく、参加者の数をほぼ減ずることなく閉幕できたことは、多くの聴講者へより効果的な情報発信が実現したものと感じている。

本フォーラムの目的は、十分に果たせたものと受け止めている。

第123回歴博フォーラム

「世界史の中の明治維新と国民の誕生」 2025年12月13日（土）

主 催 国立歴史民俗博物館
 会 場 国立歴史民俗博物館 講堂
 参加者 205名

1. 開催趣旨

本フォーラムは、総合展示第5室「近代」のリニューアルオープン（令和8年3月17日）を前に、展示を構成する3つの大テーマのうちの1つ、「〈国民〉の誕生」を中心としながら、世界史の中の「開国」とその中における国民の誕生に関する展示内容を紹介するものである。明治維新を北方の境界領域の経験から見直す基調講演を軸に、19世紀の東アジアの国際関係や対馬・琉球という境界領域から見た維新変革、国民化／臣民化と軍隊・地域社会などの事例を取り上げ、展示構成の意図や学術的背景について解説する。近世近代転換期の人々の経験を様々な角度から照射しつつ、新展示の魅力へと誘う。

2. 開催内容

- 12:30～12:35 開会挨拶 西谷 大（国立歴史民俗博物館・館長）
 12:35～12:45 リニューアル趣旨説明 大串 潤児（国立歴史民俗博物館・歴史研究系・教授）
 12:45～13:00 フォーラム趣旨説明 福岡 万里子（国立歴史民俗博物館・歴史研究系・准教授）
 13:00～14:00 基調講演「北の明治維新—境界領域の経験から」 谷本 晃久（北海道大学 大学院文学研究院・教授）
 14:00～14:15 休憩
 14:15～14:35 コメント「国際関係の中の戊辰戦争—榎本軍と箱館戦争を題材に」 保谷 徹（東京大学・名誉教授）
 14:35～14:55 コメント「東アジア国際関係と西洋近代国際関係」 木村 直也（元 立教大学文学部・特任教授）
 14:55～15:15 コメント「国民化／臣民化と軍隊・地域社会—北の世界から考える」 荒川 章二（国立歴史

民俗博物館・名誉教授)

15:15～15:30 休憩

15:30～16:25 パネル・ディスカッション

16:25～16:30 閉会挨拶

総合司会 福岡 万里子

3. 総括

このフォーラムは、総合展示第5室「近代」のリニューアルオープンを前に、展示を構成する3つの大テーマのうちの1つ、「〈国民〉の誕生」を中心としながら、世界史の中の「開国」とその中における国民の誕生に関する展示の魅力を発信することを狙いとして、開催した。北海道大学の谷本晃久氏はリモートでの基調講演、パネル・ディスカッションへの参加となった。

冒頭の西谷館長による挨拶のあと、大串氏がリニューアルの趣旨を、福岡がフォーラムの趣旨と新展示「〈国民〉の誕生」の概要を紹介した上で、谷本氏が、北方でのアイヌ民族の暮らしが、明治維新を経て〈国民〉化の政策の下に置かれることで激変していく過程を、江戸時代後期の状況からの変化を丁寧に追いつつ概観される基調講演を行った。続いて3つのコメントは、いずれも基調講演に連動し、日本の北方ないし西方の境界領域での明治維新を、西洋諸国との関係や東アジア国際関係の中に位置づけながら事例紹介したり、北方の境界地域を日本領土に組み込み大量の和入植者及び少数民族となったアイヌ民族を軍隊の編制により〈国民〉化していく過程を詳しく紹介するものとなった。これらはそれぞれに、リニューアル後の新展示を念頭に内容を組み、新展示のエッセンスや、新展示では伝えきれなかった「世界史の中の明治維新と国民の誕生」にまつわる境界領域の物語を盛り込んだものである。

登壇者の熱意も相まって、コメントの一部はかなり時間を超過したことから、最後のパネル・ディスカッションは30分弱で展開して会を締め括る必要があったが、横断的な論点を取り出す要を得た質疑応答が行われ、最後に大串氏による適切な締め括りの辞を得、結果的には引き締まった討論となったかと思われる。アンケートでは時間超過の件について厳しい意見もあり、コメンテータの持ち時間が極めて限られる時間設定については、今後検討の余地もありそうに思われるが、総じて、内容的に充実し、新展示への期待を高めるフォーラムを実現し得たものと考えている。

歴博映像フォーラム19

「同じ墓に入る人びと―沖縄県糸満の門中行事」

2026年2月7日(土)

主 催 国立歴史民俗博物館

会 場 国立歴史民俗博物館 講堂

参加者 80名

1. 開催趣旨

比嘉政夫(1936-2009)は、沖縄・東アジア・東南アジアを研究対象として社会人類学・民俗学的研究に取り組み、多くの業績を残した研究者である。歴博に在職していた1995年度には、歴博研究映像『沖縄・糸満の門中行事―門開きと神年頭―』を制作した。歴博では、この映像に基づき、糸満の門中行事の「現在」をテーマとして2022年度より調査・研究に着手し、新たな研究映像を制作した。糸満の門中の歴史、現在の門中行事の姿、そして映像記録を活用することの意義について、映像の上映を交えて考察する。

2. 開催内容

10:00～10:05 開会挨拶 西谷 大(国立歴史民俗博物館・館長)

10:05～10:10 趣旨説明 内田 順子(国立歴史民俗博物館・副館長／民俗研究系・教授)

10:10～11:10 上映 歴博研究映像『沖縄・糸満の門中行事―門開きと神年頭―』(1996年、抜粋・60分)

11:10～12:00 基調講演「同じ墓に入る人々―沖縄県糸満市字糸満の下茂腹門中―」 金城 善(元糸満市立中央図書館長)

12:00～13:00 休憩

13:00～15:00 上映 歴博研究映像『墓をまもる―糸満・門中のいま―』(2026年、120分)

- 15:00～15:15 休憩
 15:15～15:30 映像へのコメント 金城 善
 15:30～15:50 研究報告①「沖縄における葬墓制の変容と門中墓」 山田 慎也（国立歴史民俗博物館・民俗研究系・教授）
 15:50～16:10 研究報告②「映像で記録する糸満の門中行事」春日 聡（多摩美術大学・非常勤講師／国立歴史民俗博物館・客員准教授）
 16:10～16:25 研究報告③「『沖縄・糸満の門中行事—門開きと神年頭—』の撮影素材の特徴」内田 順子
 16:25 閉会挨拶
 総合司会：川村 清志（国立歴史民俗博物館・民俗研究系・准教授）

3. 総括

本フォーラムでは、沖縄県糸満市における父系親族集団「門中」と門中墓を中心とする祖先祭祀・年中行事をテーマとし、比嘉政夫が1996年に制作した歴博研究映像『沖縄・糸満の門中行事』と、共同研究により新たに制作した『墓をまもる—糸満・門中のいま—』の上映を軸に、約30年の時間的隔たりのなかでの変容と継承の実態を検討した。基調講演および研究報告では、葬墓制の変化、映像記録の方法論、撮影素材の特質を多角的に論じ、地域社会の変化を記録・継承する手段としての映像の意義と、民俗研究における活用の可能性を提示した。とりわけ、現在の洗骨の一連の流れの中で、継承されていると考えられる内容と、実際の運用とのあいだに差異が生じ得ることが上映を通じて共有され、映像への注記や説明の補強の検討が必要であることがわかった。今後、3月に撮影地関係者と協議を行い、4月の現地上映会までに課題に対応する計画である。アンケート結果では、「よかった」85%、「どちらかというよかった」8%と、全体の9割以上が肯定的な回答であった。自由記述では、過去の映像と新作を比較することで理解が深まったこと、貴重な記録映像と研究者による解説を併せて提示する構成が有益であったことなどが評価された。一方で、「映像室みたいところでみられるチャンスがあったりするのかなのか知りたかった。大阪の民博みたいに自由にみられると通ってしまうんだけど」との意見もあり、歴博研究映像を館内メディアルームで常時視聴可能であることが十分に周知されていない実態がうかがえた。今後は、映像フォーラムの継続開催とあわせて、研究映像の常設的な視聴機会に関する広報の強化を検討する必要がある。

歴博映画の会

【概要】

歴博では、日本の民俗と歴史に関する映像資料の制作と収集をおこなってきた。民俗に関する映像制作にはふたつのカテゴリーがあった。ひとつは「民俗研究映像」で、歴博の民俗研究系の研究者が、各々の研究対象を、専門的な視点から映像化するものである。1988年より制作を開始し、現在も継続している。もうひとつは歴博と文化庁が協議の上、「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」の中から撮影対象を選び、一般向けにわかりやすい映像を記録する「民俗文化財映像資料」である。歴博ではこのほか、民俗学・歴史学関連の民俗誌映画・記録映画も収集・保管している。

これらの映像を通じて民俗と歴史への知識と理解がより深められることを期待し、2007年度より、国立歴史民俗博物館友の会の協力を得て、「歴博映画の会」を開催して上映することとした。2025年度の開催は下記の通りである。

【第45回歴博映画の会】

- 開催主体 主催：国立歴史民俗博物館、協力：国立歴史民俗博物館友の会
- 開催日時 2025年5月24日（土）10:20～16:00
- 場所 国立歴史民俗博物館 講堂
- テーマ 沖縄久高島の民俗—『イザイホー』と『イラプー』
- 参加者 123人
- 上映作品
 『沖縄久高島のイザイホー』（2022年デジタルリメイク版、1979年、110分）
 『沖縄久高島のイラプー』（2024年版／102分）
- 内容

『沖縄久高島のイザイホー』は、1978年、16mmカラーフィルムで撮影した映像を2K-fullでデジタル化し、16:9の画面に変換するだけでなく、儀礼歌謡の歌詞・現代語訳を加えるなど、オリジナルの作品になかった工夫を凝らしたデジタルリメイク版である。「イザイホー」とは、沖縄県久高島で12年に一度、午年

に行なわれる祭礼で、現在は中断している。本作品は、貴重な記録映画のひとつである。『沖縄久高島のイラプー』は、「イザイホー」に深く関連する供物「イラプー」（エラブウミヘビなどの燻製）作りについて、1978年に撮影された未公開映像に、現在の久高島の関係者を新たに取材した映像を加え、新たな映像作品としてまとめられたものである。両作品の上映と、岡田一男監督のトークを通して、地域文化の継承に、映像がいかに貢献できるか、考える機会としたい。

8. 解説 岡田 一男（文化財映像研究会、東京シネマ新社）

【第46回歴博映画の会】

1. 開催主体 主催：国立歴史民俗博物館、協力：国立歴史民俗博物館友の会

2. 開催日時 2025年10月4日（土）13：30～15：30

3. 場所 国立歴史民俗博物館 講堂

4. テーマ バリと日本の『送魂儀礼』

5. 参加者 79人

6. 上映作品

『日本の送魂儀礼―盆の送り―』（監修・撮影：坂本 要，編集・整音：春日 聡／2017年／38分）

『ンガベン―バリ島ルクルク村の火葬儀礼―』（監督・撮影・録音・編集・整音：春日 聡／2017年／30分）

7. 内容

送魂儀礼に焦点を当て、日本列島とバリ島の事例を解説する。

『日本の送魂儀礼―盆の送り―』で扱う映像素材は、坂本 要氏（民俗学者）が念仏踊りの成立と変遷というテーマのために、現地調査の資料として撮影したものである。

当初、公開する目的はなく個人的な研究資料として撮影されたが、資料映像は700本を超える。本作は、その中から14か所を選び、坂本氏監修の元、春日聡（本館客員准教授）が編集・整音してまとめた記録映像作品である。撮影初年の1978年から45年以上が経ち、途絶えた行事も増え、送魂儀礼を取りまく状況は大きく変化している。当時の様子やその後の状況について、坂本氏が解説する。

バリ島の送魂儀礼では、バリ＝ヒンドゥーの宇宙観に基づき、死者の霊魂がより高位の祖先霊へと上昇することが希求され、手厚い儀礼が死後数十年にわたって繰り返される。火葬儀礼はそのはじまりの儀礼である。

『ンガベン―バリ島ルクルク村の火葬儀礼―』は、市井の人々における火葬儀礼の1日をまとめた記録映像作品である。

8. 解説 春日 聡（国立歴史民俗博物館・客員准教授）／坂本 要（筑波学院大学名誉教授・まつり同好会代表）

【第47回歴博映画の会】

1. 開催主体 主催：国立歴史民俗博物館、協力：国立歴史民俗博物館友の会

2. 開催日時 2026年1月17日（土）13：30～15：30

3. 場 所 国立歴史民俗博物館 講堂

4. テーマ 能登半島地震・復興の行方

5. 参加者 80人

6. 上映作品

『能登半島地震 復興の行方』（監修・撮影・編集：川村 清志／2025年／約35分）

『珠洲市の文化財レスキュー―能登半島地震と文化財』（監修・撮影・編集：川村 清志／2025年／約20分）

7. 内容

能登半島地震の発災から現在までの調査経過と文化財レスキューの一端を報告する。2024年の元旦に発震した能登半島地震は、マグニチュード7.6、最大震度7を記録し、奥能登の多くの地域に甚大な被害をもたらした。関連死を含めると650名を超える人命が失われ（2025年8月現在）、全村避難を余儀なくされたコミュニティも少なくない。地域の復旧作業は遅々として進まず、震災から1年半以上が過ぎても、被災地の状況は、決して予断を許すものではない。しかも昨年9月の能登半島豪雨によって、地域は再びさらに大きな被害を受けた。過疎・高齢化が進行していた奥能登地域において今時の震災は、コミュニティの根幹を揺るがし、その存続に大きな陰を落としている。

映像では、震災後から現在に至るまでの被災地の様子を奥能登の珠洲市を中心に紹介する。震災後の片付けや避難所の様子から、震災以前から協力してきた国際芸術祭の会場や民具の収蔵施設の被災状況の記録、

地元での支援の試みと昨年の豪雨後の姿、震災からの復興を願う祭りの記録映像などを紹介したい。また、それと並行して行われた文化財レスキューの取り組みと救出された文化財の一端についても紹介する予定である。

8. 解説 川村 清志（国立歴史民俗博物館・民俗研究系・准教授）

歴博講演会

歴博の教員や館外の研究者が、自らの研究分野の最新情報を一般の聴講者にも分かり易く発表する。2025年度は8回開催した。

開催日程・演題・講師については「第二部 事業編 IX 広報・普及 2 歴博講演会」を参照。

くらしの植物苑観察会

くらしの植物苑は、生活文化を支えてきた植物を系統的に植栽し、素材となった植物と博物館の展示資料を関連づけ、歴史への理解を深めることを目的として、1995年9月に開設した。観察会は、一般の方を対象に実施し、四季折々の植物を観察し、人と植物とのかかわりについての理解を深めている。2025年度は9回開催した。

開催日程・演題・講師については「第二部 事業編 IX 広報・普及 4 くらしの植物苑観察会」を参照。

[展示解説]

・総合展示・特集展示ギャラリートーク

一般を対象に、歴博教員が総合展示や特集展示の内容について解説し、理解を深めてもらうことを目的として4回実施した。

・企画展示ギャラリートーク

一般を対象に、歴博教員及び館外研究者が、企画展示の内容について解説し、理解を深めてもらうことを目的として6回実施した。

開催日程・講師については「第二部 事業編 IX 広報・普及 3 ギャラリートーク」を参照。

[企画展示関連イベント]

企画展示に連動した体験型イベントとして、以下を実施した。

・企画展示「時代を映す錦絵―浮世絵師が描いた幕末・明治―」

「ミニ錦絵を摺ってみよう」

絵葉書大の用紙にインク浸透式重ね刷りキットを用いて展示資料の錦絵を摺る。

・企画展示「野村正治郎とジャポニスムの時代―着物を世界に広げた人物」

「近代流行のステレオ写真を鑑賞しよう」

展示資料のステレオ写真の複製を専用のビューワーを使用して立体視することにより、近代の人々の写真鑑賞の在り方を追体験する。

「100年前の香りを楽しもう」

野村正治郎が販売した室内線香をケースの穴から嗅いで、実際の香りを楽しむ。

「オリジナル着物カードをつくろう！」

二つ折りのカードの間に、複数の端切れを自由に貼り込んで、オリジナルデザインの着物カードを作成する。